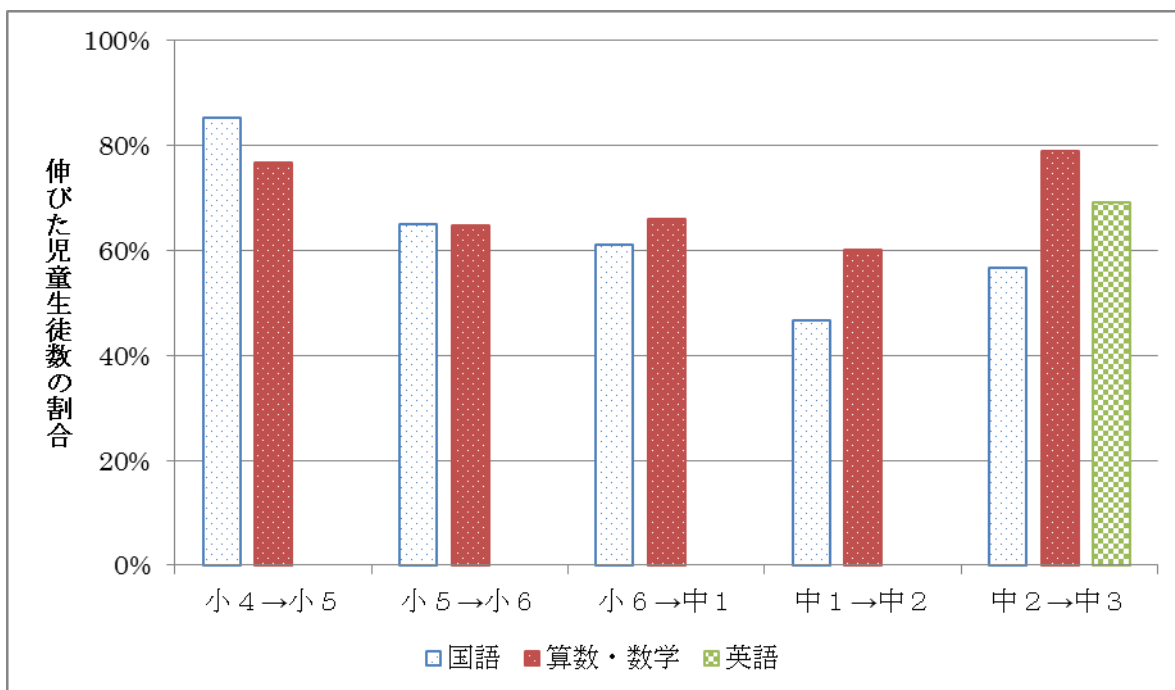


1 「学力の伸び」の状況

○ 県全体の状況

- 小学校4年生から5年生では、国語、算数とも、多くの児童の学力が伸びている。
 - 小学校5年生からは、学年が上がるごとに学力が伸びた児童生徒数の割合がやや減少していく。
 - 特に、中学校1年生から2年生で、伸びた生徒数の割合が最も少なくなっている。
 - 中学校2年生から中学校3年生では、学力が伸びた生徒数の割合が上昇に転じている。
- ⇒ いわゆる「中1ギャップ」などの影響があると考えられる。

教科ごとの「学力の伸び」が見られた児童生徒数の割合



教科	小4→小5	小5→小6	小6→中1	中1→中2	中2→中3
国語	85.4%	65.1%	61.2%	46.6%	56.6%
算数・数学	76.8%	64.9%	66.1%	60.2%	79.0%
英語	—	—	—	—	69.1%

※ 上記のグラフ及びデータは、昨年度から「学力の伸び」が見られた児童生徒数の受検者数全体に対する割合である。教科ごとの「学力の伸び」が見られた（各学校に送付した帳票「教科に関する調査 採点結果」にある「学力の伸び」の値が1以上であった）児童生徒数を、受検者数で割った値であり、いわゆる「伸び率」（全ての児童または生徒の「学力の伸び」の値を足し合わせて、受検者数で割った値）ではないことに注意されたい。

○ 分析と対応策

- 本年度の調査結果では、学力が着実に伸びた学年と、伸びなかった学年が見られた。
- 小学校中学年から高学年にかけても、学力が伸びた割合は低下傾向にあるが、中学校1年生から2年生で割合が最も小さくなることについては、中学校入学後に学習内容が複雑化したり、抽象化したりする傾向があることが理由として考えられる。
- 今後の対応策として、小中連携をより一層推進していくことが考えられる。例えば、同じ校区内の小・中学校で合同研修会や授業研究会を実施し、相互に授業を見合って指導法の違いについて共通理解を行った上で授業改善を図る、お互いの学習内容について情報共有し、その違いを理解した上で児童生徒への指導改善を行うなどである。

2 小学校4年生から中学校3年生までの各教科の学力レベルの分布

(1) 国語

	小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生	中学校3年生
レベル12						2%
レベル11					2%	5%
レベル10				7%	7%	14%
レベル9			9%	11%	19%	27%
レベル8		24%	29%	32%	33%	27%
レベル7	35%	26%	26%	28%	26%	15%
レベル6	18%	25%	24%	16%	10%	10%
レベル5	22%	14%	12%	6%	3%	
レベル4	13%	8%	1%未満	1%未満		
レベル3	12%	3%	1%未満			
レベル2	1%未満	1%未満				
レベル1	1%未満					

※ 数値は、学年ごとに各レベルに属する児童生徒の人数を全受検者数で割った値

○ 分析と対応策

- ・ 小学校では、下位層（下位1レベル分）の児童は学年が上がるごとに減っている。
- ・ 小学校6年生では、上位層（上位2レベル分）が大きく減り、下位層（下位1レベル分）に該当する児童は、ほとんどいなくなる。
- ・ 中学校では、学年が進行するに従って、上位層（上位2レベル分）は減り、下位層（下位2レベル分）の割合が増えている。
- 小学校では、下位層への手立てには効果が表れているが、上位層を伸ばす工夫が必要と考えられる。
- 中学校では、下位層（下位2レベル分）と上位層（上位2レベル分）への指導の工夫が必要である。
- 中学校第1学年から第2学年では、下位層が増え、上位層が減っている。小学校と中学校で教科の課題等を共有し、連携を図る必要がある。

(2) 算数・数学

	小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生	中学校3年生
レベル12						7%
レベル11					4%	5%
レベル10				9%	8%	14%
レベル9			12%	11%	14%	18%
レベル8		14%	11%	18%	21%	18%
レベル7	19%	22%	24%	22%	21%	18%
レベル6	22%	25%	20%	18%	16%	20%
レベル5	24%	20%	18%	12%	18%	
レベル4	16%	11%	9%	10%		
レベル3	10%	5%	6%			
レベル2	5%	2%				
レベル1	3%					

※ 数値は、学年ごとに各レベルに属する児童生徒の人数を全受検者数で割った値

○ 分析と対応策

- ・ 学年が上がるにつれて、各学年の分布の山が少しずつ下になっている。
- ・ 小学校4年生から中学校2年生では、学年が上がるにつれて、最も高いレベルの児童生徒の割合は減っているが、中学校3年生では、最も高いレベルの生徒の割合は増えている。
- ・ 学年が上がるにつれて、最も低いレベルの児童生徒の割合は増えている。
- 小学校では、特に、中位層を伸ばし、上位層を増やすための指導の工夫が必要である。中学校では、特に、低位層を伸ばし、中位層を増やすための指導の工夫が必要である。
- 学力レベルの低い児童生徒に対して、授業において、算数的活動、数学的活動の充実を図り、生活との関連を重視することが重要である。学力レベルの高い児童生徒に対して、学習したことを活用して考えたり判断したり表現したりしようとする態度を育てることで、より一層学力が伸びると考えられる。
- 指導内容の系統や関連を踏まえ、児童生徒の実態に即した適切な指導と評価の計画を作成、活用し、児童生徒一人一人を確実に伸ばすことが大切である。

(3) 英語

	中学校 2 年生	中学校 3 年生
レベル 12		11%
レベル 11	12%	13%
レベル 10	11%	14%
レベル 9	20%	21%
レベル 8	20%	19%
レベル 7	20%	14%
レベル 6	13%	9%
レベル 5	5%	

※ 数値は、学年ごとに各レベルに属する児童生徒の人数を全受検者数で割った値

○ 分析と対応策

- ・ 全体としては、学力のレベルが正規分布に近い。
- ・ 学力レベルの分布から、ほとんどの生徒が着実に学力を身に付けているようである。本県においては、多くの英語科教員が授業を英語で行っていることなどが理由として考えられる。

【参考】授業における、英語担当教員の英語の使用状況

	本 県	全国平均
中学校第 1 学年	75.7%	58.3%
中学校第 2 学年	74.7%	56.9%
中学校第 3 学年	71.4%	54.8%

「発話をおおむね英語で行っている」と
「発話の半分以上を英語で行っている」
を合わせた教員の割合

※ 文部科学省「平成 27 年度英語教育実施状況調査（中学校）」より

- ・ 中学校 2 年生から 3 年生にかけて、それぞれの上位層（上位 2 レベル分）と下位層（下位 2 レベル分）を見ると、いずれも中学校 3 年生の方が多く分布していることが分かる。英語学習に意欲的に取り組み、高い学力を身に付けている生徒が増えている一方、学力が定着していない生徒も増えていると考えられる。
- 学校ごとに生徒の学力レベルを把握し、学力層を意識した指導（特に、学年が上がるごとに下位層の生徒が増加していかないような）を行うことが大切である。
- 今後も、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成するため、生徒の発達段階及び興味・関心に即し、学習内容を繰り返して指導し定着を図ることや、アクティブ・ラーニングや小中連携の視点を踏まえた授業改善等を行うことで、より一層学力が伸びていくと考えられる。

○ 「埼玉県学力・学習状況調査のデータ活用事業」について

埼玉県の学力向上のため、本調査のデータを統計学や教育学に基づき、より詳細に分析することを目的として、外部の研究機関と連携したデータ分析を行っています。

これにより、本調査結果を、指導と学力の視点からより専門的に分析し、例えば、効果的な指導方法などを明らかにしたいと考えています。この調査結果については、平成 28 年度末にお示しする予定です。そちらの結果についても、学力向上や生徒への指導の参考として御活用ください。